口腔内科的発想による
歯周病抗菌薬物療法と口腔漢方

王　宝禮 氏
（大阪歯科大学歯科医学教育開発室教授）

最近になり、全国の先生から私のもとに「どんな歯周病患者さんにジスロマックが適切ですか？」、「口の渇き、舌や口内の痛みにはどんな漢方薬が有効ですか？」などの声が届く。このように、今、わが国の歯科医療は口腔内科的発想による歯科医療を必要としている。

さて、歯科医療は、歴史的な背景から、保存、補綴、矯正、抜歯といわゆる口腔外科治療が主である。近年では、外科的手法でない、重度の慢性歯周炎に対して内服による抗菌薬を用いた治療や、口腔乾燥症、味覚障害、口臭症、口内炎、口臭症に対して従来からの西洋薬で対応できない場合には漢方薬の有効性が報告されてきている。このような時代背景から、今後の歯科医療において、口腔外科的な治療と共に、口腔内科的発想による歯科医療の普及が大切である。つまり、口腔をひとつの臓器と捉え、口腔疾患に対して、検査、診断、投薬という内科的治療を、口腔内科と提唱してきた。特に、この数年に、う蝕や歯周病治療に細菌数を同定する唾液検査が普及し、内服による慢性重度の歯周炎に対して歯周病抗菌薬物療法が普及した。

時代は大きく動いた。日本歯周病学会が抗菌作成指針委員会を立ち上げ、「歯周病患者における 抗菌療法の診療ガイドライン 」が発行された（日本歯科医学会ガイドラインライブラリ www.jads.jp/ ）。さらに、日本歯科薬物療法学会漢方 EBM 委員会が立ち上がり、それぞれの学会がこれらの薬物療法の EBM の検証を歯科医療従事者や国民に提示している。そして、昨年 2012 年春には、日本歯科医師会発行の歯科薬価関連基準表に 7 種（立効散、排膿散及湯、半夏瀉心湯、黄連湯、茵陳蒿湯、白虎加人参湯、五零散）の漢方薬が列挙されました。この快挙は、国民の口腔疾患への訴えに応えた事と、わが国の多くの臨床家や歯科医学研究者の信念や情熱であったと思う。

今回、口腔内科的発想による「歯周病抗菌薬物療法として治療抵抗性歯周炎へのジスロマック」と「口腔疾患への漢方薬」の処方方法や投薬期間、副作用への注意点を具体的にお話させていただく。

皆様と未来への扉を開けたい。

「参考文献」
1．王宝禮：歯科保険で適用される漢方薬の再考　月刊保団連 8 月号 2013
2．王宝禮：口腔疾患に有効な漢方薬を科学する―西洋医学と東洋医学を融合する口腔医療を目指して―　日本歯科医師会雑誌 64. 19-29. 2012
3．王宝禮：歯周病に対する経口抗菌薬は有効なのか？―臨床薬理学者からの見解―　日本歯科医師会雑誌 62. 6-17. 2009
4．王宝禮：口腔内科の時代　バイオフィルム感染症としての歯周病薬物療法　月刊保団連 8 月号 ,12 月号 2007, 2 月号 2008

●王　宝禮（おう　ほうれい）氏プロフィール

1986 年　北海道医療大学歯学部卒業
　　北海道大学歯学部大学院にて歯学博士
1990-96 年 北海道大学歯学部予防歯科学講座助手
1992-94 年 米国フロリダ大学口腔生物学講座研究員
1996 年　大阪歯科大学薬理学講座講師
2002 年　松本歯科大学歯科薬理学講座、同大学病院口腔内科教授
2010 年　現職

【主な関連役職】
日本口腔内科学研究会会長
日本歯周病学会「抗菌薬の指針作成委員会」副委員長
日本歯科薬物療法学会「漢方 EBM 委員会」委員長
日本歯科東洋医学会副会長
日本禁煙科学会歯科部門会長
日本口腔サプリメント研究会顧問
オゾン医療研究会副会長

【専門分野】
西洋医学および東洋医学